時流を読む

市民参画で地域農業に活力

農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一

十分ではない攻めの農業

あらたな農業政策が展開されつつあり、〝攻めの農業〟と称される。その中身は①需要フロンティアの拡大（国内外の需要拡大）、②バリューチェーンの構築（付加価値向上）、③生産現場の強化、④多面的機能の維持・発揮、の四つの柱からなる。

担い手不足と耕作放棄地発生を抑制していくため、構造政策への取組みは欠かせない。とはいえ国際分業が進展する中での競争力確保は困難であり、これだけでは将来展望の獲得は難しい。

ポイントとなる市民の農業参画

日本農業の特徴は多様性にあるが、差別化により輸入農産物に対抗していくにあたっては、都市農村交流が重要な意味を持つ。差別化では品質、味、安心等が主たる要素となるが、いま一つ大きなポイントとなるのが農業への市民の参画であり、これによって地域の活力を取り戻していくことが欠かせない。市民が参画しての多様な農業を広げ、構造政策に絡ませながら地域農業を確立していくことが今こそ求められるといえる。

日野市のコミュニティガーデン

東京都日野市の浅川近くにある住宅地に隣接して、せせらぎ農園〝春の小川〟が快い音を立てて流れ、野菜畑に花やハーブが彩りを添えている。農園に約200世帯から出される生ごみを直接投入して発酵・堆肥化させており、リサイクル活動と一体となっている。約20人の老若男女が基本的には自がある。せせらぎ農園は「身近な空き地や既存の緑地を住民の手で美しい庭（畑）に変え、安全で緑豊かな美しいまちを創造していく協働の庭づくり活動」によって作られたコミュニティガーデンである。約2、100㎡の農園の中を

らの都合がいい時間に農作業を楽しんでおり、〝地域の庭〟であるとともに、〝触れ合いの場〟〝みんなの居場所〟となっている。

筑紫野市の体験農園

福岡市から車で小1時間、久留米市との中間に筑紫野市はある。この地方都市郊外の山あいの傾斜地に「つくし体験農園」がある。果樹や竹林もあり里山的雰囲気が漂う中に、30㎡と17㎡の50ほどの区画が設けられ、ここで指導料を払って農園主から指導を受けるとともに、生産された農作物を持ち帰ることのできる体験農園が行われている。消費者がここに出入りし、農作物を生産し交流することによって荒廃農地を甦らせてきた。「農家と市民をつなぐパートナーシップ農業」は「地域資源を総合した魅力作り」にもつながっている。

小さな農業が持つ潜在力

上の事例だけでも「体験農園は都市特有の経営手法」にとどまらないことを実証しているとともに、地域農業を下支えし活力をもたらしていることを示している。小さいながらも市民参画による農業の持つ潜在力を生かしていくことが必要な時代が到来している。